

会報 高鷲の文化財

第42号 題字：麦島博昭

高鷲町文化財保護協会 発行：令和3年9月13日

満州開拓に関する歌詞発見される

先日、ある会員M氏から満州開拓に関する歌詞をいただきましたので、たかす開拓記念館に係るものと考え、会員の皆さまに紹介します。高鷲から満蒙開拓へ行かれた方は主に「郡上村開拓団」と「琿春高鷲村開拓団」の二団へ多く入植されました。今回戴いた歌詞は郡上村関係のもので、郡上村開拓団について紹介するとともにこの二つの歌詞を記し、お知らせします。

大陸郡上村建設当時を偲びて

◎大陸行進曲

作詞：楠章、作曲：簗島駒之助

- 1 いまだ見ぬ国お光の里 赤い夕陽のあの新天地
あれこそ我等の第二の故郷 永遠に魂落ちつく所
- 2 夢に幻にあこがれ已まぬ 赤心こめたる日の丸の旗
なびく曠野の碧空高く みくに心は今燃え上がる
- 3 聖旨うけつぎ歩調を揃え 心一つにみわざに生きて
郡上拓士の踏み行く所 天地と共に極まり知らず
- 4 大地をゆるがす萬歳高く ひびく郡上の魂とけて
長期建設言葉もはずみ まめなお蔭でなにくそやるぞ
- 5 霜よ降れ触れ嵐を襲え 興亜の礎 理想の光
大陸郡上を産み育てるに 何で命が惜しかろう

郡上村開拓団



昭和6年満州事変が起こり、翌年には満州国が建国され、その年から日本の満州開拓移民の入植が始まりました。その目的は(1)農村の二、三男対策



(2)日本軍の食糧確保(3)大陸最北最前線の軍事的防御で、昭和7年に第1次満州開拓団が500名募集されたのが最初です。日本政府は最初、5ヶ年で2万戸の送出の計画を立て、昭和12年以降20ヶ年で百万戸という大計画に変更しました。

また同年には国策として満蒙開拓青少年義勇軍の募集をはじめます。この義勇軍の予備訓練が凌霜塾で行われ、指導者は木島孝一所長、楠章、和田年男、宗広力三氏らがあたりました。特に耕地の少なく、農家の二、三男の働き口の少ない郡上郡では、農村更生計画が適用されて大陸移民の熱が高まり、凌霜塾の幹部は満州視察を通して塾生を中心として積極的な動きを取る活動をするようになり、前述の曲ができました。このような気運の時の昭和14年1月、満州より田中弘和氏が郡上郡を訪れ、郡上青年団(団長浅野弁真)が中心となって大陸郡上村建設のため、先遣隊の募集・拓殖講習・幹部の

入植地視察などを行い、同年3月28日大陸郡上村開拓先遣隊22名が4月1日の夕刻入植地満州の吉林省舒蘭県小城子に派遣されました。

入植後は興亜凌霜塾を開設、凌霜不撓の精神をもって、苦難に耐え開拓村造りに精進し、民族協和の樂土建設に努力しました。この結果、団員とその家族825名の大所帯の郡上村開拓団は満州屈指の開拓団となり、今後の見通しもできました。

昭和14年：全共同経営による営農が始まりました。

昭和15年：精米所・製材工場・簡易宿泊所が建設されました。

昭和16年：本部・倉庫・国民学校校舎が建築され、興亜凌霜塾女子部を開拓女塾となりました。

昭和17年：児童宿舎・教員住宅・日本酒醸造所・同附属舎が建築され、開拓科学研究所も建設されました。

昭和18年：開拓科学研究所幹部宿舎・病院・女塾舎・本願寺布教所が建築され、また岐阜県より乳牛40頭、石川県より乳牛種牝1頭を購入されました。

昭和19年：一応入植が完了し、山下勘治団長は召集されました。

昭和20年：5月1日に開拓団は開拓協同組合に移行され一般行政に入り、辻村徳松団長代理は小城村長兼郡上開拓協同組合長となりました。

団員は大陸行進曲の中にもあるように「ナニクソ、オカゲサマの凌霜精神のもとに五族協和の実を挙げるべく入植、食糧増産の一翼を担い、現住民との融和もよく、着々とその成果を上げていった」と思います。随所に凌霜魂の言葉の力が出てきます。そして下記の曲を歌いながら作業をしたと思います。

◎拓土を送る歌

作詞：二宮安徳

- 1、起てよ亜細亜の朝明に 緑かがやくこの大地
土の香高く逞しく いまこそ拓け大陸に 若い郡上の起つ秋だ
- 2、仰げ青雲この沃野 希望の空の限りなく
行くぞ地平の涯までも これから広く限りなく 協和の樂土建てるのだ
- 3、おお大陸に凌霜の 鳴るぞ新たに鋤の音
萌え立つ土に憧れて 起つたこの日が日本の 若き生命に生きる日だ
- 4、日の丸揚げよあの丘に 君が代唱えこの川に
わが同胞が赤い血で 護つて呉れたこの土に きつと咲かすぞ郡上魂

毎週水曜日9時から高鷲町文化財保護協会が、町民センターで「高鷲の拓く力」についてビデオやおしゃべりなどの交流会を開いています。
参加は自由ですので、お隣さんもお誘いの上ご参加ください。